心あったかニュース

NMCAA
NO3

ボリビアの「母なる地球の法」

日本の平和憲法も世界に誇れるものですが、ボリビアにも世界に宇宙にも誇れる憲法があります。それは「母なる地球の法」というもので地球そのものを生き物と認め、そこに存在する全ての自然に人間と同様の権利を認める。つまり、基本的地球権の尊重。ここで間違ってはいけないのは、人間が地球に権利を与えるのではなくて、地球にもともとある権利を再認識するということ。それはきれいな水と空気であり、人間が破壊したものを元に戻す権利そして、汚染から解放される権利であるということです。架空のお話ではなく、ボリビアの大統領は、「21世紀を環境破壊と気候変動を止めるための世紀」にしようと訴えた。「われわれはこの惑星を絞め殺そうとしており、それはとりもなおさず自分自身の首を絞めていること」なのだから、と。そして「わたしたちはこの星を所有しているのではなく、むしろ、この星に抱かれているのだ」。

「母なる地球が商品のひとつなんてことはありえない」と彼はいう。実はボリビアは、ラテンアメリカの中でもひときわ開発水準が低い国で、豊かな天然資源を持つのに非常に貧しい国であり、「黄金の王座に座る乞食」と形容されたこともあるような国。でも、人間も自然の一部であることをボリビアの人達が先祖から受け継いだ精神性で作ることができたのでしょう。私達日本人も先祖から自然に受け継いだ、すべてに八百万の神様がいるという自然崇拝の文化があります。黄金の王座に座る天然資源に囲まれた乞食は乞食のようでも、心は貧しくはなく心は豊ですよね。

参考（Beach Press）

不発弾を抱え1km走った警察官

インドの小さな村で、「村の中学校の裏庭に爆弾がある」という通報が警察に寄せられた。駆けつけた警察官の1人、アビシェーク・パテル巡査長（40歳）は、すぐに400人以上の生徒たちを避難させ、長さおよそ30cm、重さ10kgもある不発弾を素手で掴み、学校から1km距離を駆け抜けて水路に捨てた。「もし爆発すれば、半径500メートルほどのエリアが巻き込まれることになったでしょう。とにかくできるだけ周辺地域の住民や学校から遠ざけ、巻き添え被害を避けるために砲弾を抱えて走りました。かなりの危険を伴いましたが、400人の生徒の命を守ることの方が私1人の命よりもずっと価値があることだと思ったのです」と話した。

参考（ネタりか）

編集後記

いつの間にか私達は、便利で当たり前の暮らしにあぐらをかいて、大切なものを忘れているようです。当たり前にあるものを失いかけているのが今です。一人ひとりがみんなのために走りだす時でもあるように思いました。